

石原純新短歌抄（十）

『ももんが』 一九八八年四月号

(34)

作品六章（\*）

ある朝 樹液が逆流して土を溶かした。ゆふぐれ 感覚がこゝろと背くみづから  
を体験した。

・ 顕微鏡座の刻せられた 南方の地杭天空、ふしぎにも 平行軌道は相近づいて一  
点に交らうとする。

・ 金箔の薄片を透つたうすみどりいろの光が わたしの眼に射してくる。そこに  
網膜の細胞の一つがうごきはじめた。

・ 舞踏場のなかでは 輝かしく交錯するいくつかの高次曲線が 鈍い若くは尖鋭な

曲率で 旋り渦まいてゐます。

・ 布地がある繊維を抜きとたれたやうに 彼は いっぱんの神経繊維を喪失しそ  
してうつろに生きてゐた。

・ 陰影があかるく滲む人造大理石面、  
瞬時、無数の微生物らの揺動を感じる。

（\*）「立像」一（昭9・3）

(35)

歪んだ太陽（\*）

太陽が歪んでゐる。春のちまたに、ひとりの青年学とはその幻、を遺失した。

植物が錯覚する。昆虫らは錯覚する。そしてもつとも深刻に ぷろれたりあーとは錯覚する。

数おほくの人間の存在に偶ま眼をそむけはするが、余りに畸形な生物さへも自然は生命を惜しみなくあたへてゐるのです。

それは春靄の雫する夜であつた。人は楽園の構図をおもひながら、牧場の羊のうたをくちずさんだ。

(\*) 「立像」二(昭9・4)

(36)

葱、莧、赤いんく、阿片(\*)

ふたつの垂直な振動は まさにリサージユの図形を描きました。そこで葱の匂ひを嗅ぎたい気がします。

我執、猜疑、そして人々は莧をあまりに飲み過ぎるので、うつくしいお伽話を みんな忘れてしまひます。

針金の接触のかげんで電流は断続する。だが、彼は赤色化を疑はれながら いつも赤いいんくで指を染めてゐる。

左翼論者はなぜみんな公式化するのでせうか。阿片はなぜ人を酔はせるのでせうか。そして、経済はなぜ破綻し易いのでせうか。

(\*) 「立像」三(昭9・5)

(37)

チーズ、抒情映画、オゾン、梅\*

曾て人は闇黒を夜となづけました。やがて しつとりと齒に触れるチーズを嘗めることを 覚えました。

彼が部屋をあゆみ出たときに、雨は もう科学的には降らなかつた。ある抒情映画が彼の眼に旋廻したからです。

朝の空気に 化学者はオゾンの匂ひを感じ、その心臓にしるいペンキをいつばいに塗つてゐた。

木犀の芽がひらいた。そして 五月の憎しみは 梅の酸味を深くした。

(\*)「立像」四(昭9・6)

(36)

Tonfilm (\*)

朝、器楽が流れる、とんぼの複眼にいくつかの空が映り、やがてTonfilmの主役は声を発散しはじめました。

あの漫画風な貌にも皺が生れる。雨が碍子板に撥ねかへり、さて人生はいつも恋に汚されるのでした。

転向する心はすでにかなしい相貌せうぼうを占はしめる。雲がうすずみいろに流れ、いくつもの風車がうなだれてゐる。

規那皮のにがさ、濃い液汁を垂らすでもあらう香料植物の雰囲気、それが空間をしろくいろづけるとしたなら。

(\*)「立像」五(昭9・7)

変調 (＊)

梅雨が変調的に続き、そして負触媒が頻りに繁殖するので、人間はみづからをさへも 見失ひさうになる。

優曇華が開いたといふ。齒がみんな蝕まれて、ひとつの黒い空間を眼に漂はしめる。

なぜ、ペテロは叛かねばならなかったのであらう。牛乳が白く凝まり、黴細は天候に賄ひしようとしませぬ。

けふも みつきい・まうすは 踊つてゐました。でも、赤いinkが転落したので、それで 心臓に一つの染汚を残しました。

(＊) 「立像」六 (昭 9 ・ 8)

( 40 )

暑夏の歌 (＊)

非点収差

酷暑、天頂はしろく曇り、すべての聰明さを奪ひ去つて、つひに美学を忘れしめる。

一つのお伽話

風は 街路に死んでゐる。この地上には、ひとりの労働者をも 呼吸せしめない と云ふ。

太陽黒点は活動する  
有機的の酸敗する匂ひ、空間のひろさ、でも わたしは 明日の紫外線を みんな吸ひ込まうとする。

眩くのは誰か

けふも 暑熱はげしく、簡易舗装の路面が融ける。で、ちよつとした日陰に、飼犬 ぐつたりと 腹這つてゐました。

(\*)「立像」七(昭9・9)。初めの非点収差は光学の用語 *astigmatism* の訳語。

(41)

都会の哀愁(\*)

事実こそ不可解である

どすぐらい花辨くわべんのひとつひた、電極を失つた破れ真空管など、みだりに銀座の舗装に落ちてゐることの悲哀。

三角橋

いびつにゆがんでゐるおでんやの屋台店、固体炭素粒の飛動が、ひとりの施療患者の肺臓くすぶを燻くすぶらせたのだ。

雑音は蔓る

街路樹が強風にふかれて傾く、愚痴めいたひとつのためいき。罷業のあらそひにも疲れて 電車がはしる。

一つの機械

道路信号の標識のあをとかあか、かれはいつもそのおもしろい頭脳を負うて 昇降機とともに上下する。

神聖なる憂鬱

≪下剋上≫、蜂の巣はもう空虚であつた。でも、人生の舞台裏はいつもうす暗く不見目ふじめである。

(\*)「立像」九(昭9・11)

(42)

(乱雑な世相) (\*)

乱雑な世相におののく。唾液だえきの殺菌効果さつきんが薄れうす、リトマス紙は みだりに青くいろづく。

この作の動機は説明する迄もないと思ふ。唾液の殺菌効果があればこそ、我々はそのを意識しないまでも、安心して食物を摂ることができるわけであると云ふのに、若しさう云ふことがなくなつたら、我々は何ものに対しても一々用心してかゝらねばならぬやうに脅かされるのである。そして徳義もなにもない凶々しい人間が濶歩するやうになつてしまふ。そこでリトマス紙を真赤にいろづけるやうな、強い酸性の薬品でも欲しいといふことになるが、さう云ふ薬品を果して何に於て求めたらよいのか、これは不安の世相に対する一つの重大な問題でなければならぬ。私はこの作によつて、さうした疑問を社会に投げかけた気がする。

(\*)「立像」一〇(昭9・12)。これは無題であるが、最初の言葉をとつて假りの題とした。この作品も歴史年表を見ながら味わう方がよい。

石原純短歌抄（十一）

『ももんが』 一九八八年五月号

（43）

うつろな感傷（\*）

くろいダリアの花を見つめて、ひとりの音楽作曲家はふるへた。異形いぎやうの雲が明るんでゐたのに。

物のいろはみんな心のひがみのせいなんです。赤くつて、黒くつて。それを責めるなんて、人を誣うひるにも程があります。

薄膜かぶを被るといゝです、それで一つの特異性が生れるとしたなら。生物はみんな保護色が必要なのですから。

人はみづからをいつはらうとする。空間はことばをもたない。さすが窓の日覆ひはもう黄いろくなつてゐました。

（\*）「立像」一一（昭10・1）

（44）

赤風車劇（\*）

まつしろい装幀をもつた宗教書がある。まつくろい頁が綴られて、それはたしかに非常時の一つの世相であつた。

一つの耐震住宅設計図が完成された日に、盗びとはあたかも その冬ごもりの陰家を追はれてゐた。

酵母の酒精を醗酵させる。この非常時の雰圍気のなかには、灰色テロリズムが巷にひそんでゐる。

化学兵器らは新らしく生まれてゆく。非常時劇の背景は、ラファエルの描いた赤字國債の名画であった。

雨はしづかに地を濡らした。膨大な軍部予算よ。煙草は黄ろい烟をたてゝゐる。

\* 「立像」一二二(昭10・2)

(45)

陰影を伴ふ風景(\*)

フリジヤのしろい花にも陰翳がある。ひとりの《にんじん》が かれのひちさな人生にまつはる暗さに見いる。

偶然から偶然が生れ、そして 音楽五線紙が 裸にんぎやうのまはりを おどりまはる。

踵くびすで旋回する。流線がた思想が 交流する。そこで 或る通俗的なトーキー映画が 中断されてゐました。

勤勉で良心的な実践で 彼がひとつの謎を解かうとしたとき、あはれな労働者の眼は 黄いろくにぶつてゐた。

(\*) 「立像」一二三(昭10・3)。《にんじん》はジュリアン・デヴィ  
ヴィエ監督の映画(一九三二)。

(46)

Phänomen\*

憲法学者が巷にそしられる日であった。ファシズム風潮がこの狭い壁裏にも 醸成する。

影のなかに褐色の色彩がひそんでゐたので、心理小説家に舗道はひとつの生々し



い疑問を表白するのであつた。

春は練兵場に埃がうづまいてゐる。偶々芽ぐまうとする雑草らにも、すこし水分が足りないのですた。

太陽の大黒点群がふと現はれる。そこで人々は専らルーレットの円盤に焦慮する。

二月の或る寒い夜、ヘルクレス座新星が西ぞらに輝き、わたしの貧相な書齋では、シクラメンが凍えてゐました。

\*「立像」一四（昭10・4）

（47）

占籤大吉（\*）

思想論理がみだりに圧抑せられ、なんぢらの家には くらい夜の扉が おもくおごそかに閉ぢる。

理知がいたづらに沈黙を強ひられ、さて傷ついた鼓膜は いたましく赤みを帯びてゐる。

ある日 しきりに土のしめりがなつかしまれる。ふるい世代の特性のごとく。

黄いろいぼにやりとした顔面をみて、人々はかれを愚視した。占く >大吉、國土泰平 矣。

（\*）「立像」一五（昭10・5）

（48）

原始的な科学\*

鶯鳥の翅から曾て鶯ペンがつくられ、 黄いろい蠟燭の光りのもとで 人々は原

始的な科学を愛し始めた。

橡の嫩葉がひらく。 なにかしら粘るやうな感触。 近代的な舗道にも もう夕ぐれの植物生理が始まる。

科学書は非人間的な匂ひを発散する。 うす暗い書齋のなかで 謎のやうな象形文字が躍る。

科学の流線型を發明し、 成層圏を近よせる。《別れもまた愉したのし》、さう告発する女流作家もあつた。

(\*) 「立像」一七(昭10・7)

光は錯行する(\*)

水蒸気は褐色を嫌ふ。 彼女のやさしげな頬に一点のちひさな黒字が生れる日であつた。

秋は木屋の香がにじんで、 唇のあかいのは ここではひどく非科学的な思想でしかなかつた。

(\*) 「立像」二二(昭10・11)

(50)

永遠の火(\*)

このみちをあゆみ、  
ふと「永遠の火」の見失はれるさみしさ。  
でも、後輩たちは  
もうあの「蹠の寸法」を探り覚えたとしても 云ふのであるか。

——寺田寅彦博士を悼んで——

(\*) 「立像」二四 (昭11・2)

(51)

ひとつの道標 (\*)

皆既日食の空の憂うつさである。人間が人間を制肘する騷貌のあらはれ。

戒厳地帯のくろい構想に脅かされる。重い体液は鈍くなされる。

空間が狭められたように右往左往する。人々はその心臓に妙な区劃を感じた。

悲痛な革命の日の想念よ。あかき燐寸が折れてゐる。

壁はみんな鉛直に立つてゐる。だが、このふしぎな感情を だれが平面過ぎるといふのだ。

(\*) 「立像」二五 (昭11・3)

石原純新短歌抄（十二）

『ももんが』 一九八八年六月号

(52)

Fossils (\*)

またしても わたしの白夜は始まる。

むしばんだ 古典の書をひもどいて、

ひそかに極北の生命を探る。

(\*) 「立像」二六（昭11・4）

(63)

社会相 (\*)

牡蠣が 殻から 剥がされてゐる。 地下工事の労働者たちよ。闇夜の職場は  
すべての神秘性を失つてゐた。

試験管のなかに 生命が浮んでゐる。 社会がそれをゆずぶつて、やがて褐色に  
変色するであつた。

三角形のくろい旗は 夜を象徴する。 リラの花のにはふ華ぞのでは 資本主義  
もまた假装するのである。

階級層の異色をながめながら、 あはれ宗教者よ。 人々の涙には鹹味があると  
いふではないか。

くろい乱雲が 頻りにちぎれとんでゐる 日食皆既の空の写真。だが、こんな  
国際社会は平和である。

太陽面の激しい爆発。 ふと黄いろい蝶がそこらとび出したので、ひとりの科  
学者の幻想は やぶれてしまった。

(\*) 「立像」二七（昭11・7）

(64)

黒体輻射(\*)

およそ くらいもほど ひかる。いましめられる非常時の なにとない おののき。

怪文書が横行する世代の心理、相貌を歪めて 機敏な株屋は 煙草のけぶりを占つてゐる。

きめうな調子で 流行歌が 群集の耳を魅する。だから おもい扉も 風にほろりと仆れるのである。

巷に氾濫する国防映画。 それで 都市までが 三角形に見えてくる。

オゾンのない空気、 いつも空腹さうな庶民階級、ビルディングの壁は どうも そつぽを向き易い。

非常時とても空は青く、ひとびとは痩せる。 颱風をおそれて、 雲は气象台へひろがる。

オリンピアの聖火のもとで くにぐにの争ひが燃烧する。 世界の鎮静剤に 一塊の臭素が不足するといふ。

イベリア半島では あかい旗が 風にちぎられ、 ラテン語が、 倒さ読みされる。

(\*)「立像」三二一(昭11・11)。この年(一九三六)七月スペイン内乱起る。

(53)

新春の哲学(\*)

新春の光は いつも なごやかである。『支那さん』といふことばの響きが 妙

な匂ひを もつてゐる。

東亜協同の『心』をもとめる。空の星らは どれも スペクトル型で 選り分けられてゐる。

『無思想』の思想を 説く人がある。みんな 眼かくしを されて、手をつなぎあふ。

蹠くわかしのうつくしい 少女たちが 舞踏する。ひとびとよ、いのちと智慧との みじめな分列を いましめよ。

氷の しづかな寂寞に 真理がこもつてゐる。だから風邪をひかぬやうに 思索の 手ぶくろを 着けるがよい。

(\*)「新短歌」六の一(昭14・1)

(56)

人生の問題(\*)

人間のこゝろは かつて 神のやうに淨かつた。だが、大気の 平凡な匂ひが やがて 彼等の蒙を啓いたのだとしたなら。

すべて愉たのしく 日々の働きに 堪へてゐるのであらうか。驢馬たのは 草を食みながら 瞬間の杭くひに つながれてゐる。

温室のなかで 植物は 季節を見うしなひ、かくて 歴史の悲劇を人には さりげなく語る。

(\*)「新短歌」六の二(昭14・2)

(57)

数理の謎（\*）

楮ぐるい線條が しら壁をしきつて、あはれ 抽象ヒルベルト空間の 奇態な風情に、想ひを凝らしてゐる。

ほのかに 榛の木の芽が 萌え出たといふのに、 多様な バルカン民族のうへには 季節のない風が ふき暴れてゐる。

むづかしげな数式がならんでゐる。原子核がふしぎな分列を見せて精神病者を哭かしてしまつた。

（\*）「新短歌」六の三（昭14・5）。一九三八年末オットー・ハーンらによつて原子核分裂が発見された。

(58)

世界の憂鬱（\*）

つゆどきのこの湿潤に 神経痛を病むといふ。せめてく > 香の匂ひぶくろを彼女にさゝげよう、奇蹟のない世ではあらうが。

巷でおほ声をあげてゐるのは、あれが若しも偽善のひとつであつたとしたなら、おゝ、信天翁がうしろでよろよろ歩いてゐる。

形容があかるくくづれてゐる。 あんな魅惑をもとめて、ミルトンの失樂園にこゝろのつぶやきをおぼえる。

玩具が陽気にならんで、ちひさな人生の縮図をひろげる。だが、あの無邪気な子どもたちでもが、どこかに世界の憂うつを感じてゐる。

（\*）「新短歌」六の四（昭14・6）

(59)

ひとり言(\*)

みだりに 予言を信じ、仙人掌さぼてんは あの奇妙な姿態を 形づくつてしまった。

ふたつの扉がある。ふたつの道がある。心を愛をしめと、かつて 神は誠をへた。

初夏しよかは 雨を吸つて 機々の會話は 愉たのしげであつた。でも地上は再び憂うつな  
人々に 充ちてゐる。

鮎の子が流れ水に生れ、山葵は 辛味をつよくする。世相の轉換をつつましくか  
へり見よ。

夢遊病者の瞳めは 妙に 動かずにゐる。金雀枝えにしだの花は 黄いろく垂れてゐる。

背すぢの赤い書物が はにかんでゐる。この書物は すこし閑散すぎる。

六月)

(昭和十三年

(\*)「夾竹桃」(昭18)による、初出不明。

付記

石原先生とは直接関係ないが、間接的にはあるので書いておきたい。中平解君は  
一月号で「矢島君は歌をやめてしまったのだろうか」と書いていられるが、止め  
たわけではない。もっとも「アララギ」には一九八二年四月号のあと出していない  
いから、やめたのかと思われても無理はない。一九二四年(大正十三) 赤彦先生  
を麹町の発行所にお訪ねして「理学部の学生ですがよろしく願います」と言  
つたら先生が「両方(物理と歌)やるのはむづかしいぞ、中村(憲吉)なんか落  
第したからな」と言われた。ぼくは「はい」と答えるしかなかった。歌をやめる



気にはならなかったが、両方とも別に名を成すつもりはないのだから、好きなようにやろうと思った。果せるかな、専門の方がおろそかになったのか卒業が近づくと「お前卒業できるのか」と心配してくれる友人がいた。どうにか卒業できたが、両方とも中途半端というところだろう。「付記」が余り長くなってもおかしいから、最後に一九八〇年千葉県アララギ歌会から案内状が来たので「オリンピックはショーかサーカスカわれ知らずアテナイ人は何と見るらむ」「いにしへにオリンピアの野を走りしは金のメダルのためにはあらず」を提出しておいた。当日講師として来られた落合京太郎君は「この種の歌ではこの辺が極限でしょうね」と評した。これは歌会詠草として騰写刷りにはなったが、活字になるのはこれが初めてである。手帖の中にはもっと新しいのがある。「おのことで飯が炊けなきや駄目だぞよ天変地異には家族ばらばら」（一九二三年関東大震災を想起せよ）は一九八七年十一月作。もちろん未発表。以下省略。

石原純新短歌抄（十三）

『ももんが』 一九八九年七月号

（60）

楽譜の言葉（\*）

瞳をひらくのを惧れる。星雲は 空のかなたで 永劫を かたちづくる。

不自然な重さを愛する ひとつの心理。春は紅衣裳をかかげて もういつか去つてしまつた。

気象台では いつも 風速計がまはつてゐる。人間には 時として陽炎が楽し過ぎる。

空間は 危ふく方向を失ひかける。ふと気づくと、エジプト文字がいつも古風に踊つてゐる。

純愛なるが故に 莓<sup>いちじ</sup>実<sup>こ</sup>は あかく美しい。ドン・コザツク合唱団を聴いてゐる。

音波は 空気を しづかに揺るがしてゐる。眼にふれない ふしぎな色彩を味ふ。

（昭和十三年七月）

（\*）『夾竹桃』から

（61）

人と梟（\*）

荘嚴な夜の、だが いたも奇態な夢を趁つて、気紛れな運命は 緑いろである。

神秘が 人のこゝろを捉へ、鴉片<sup>あへん</sup>の<sup>を</sup>にがさに 感溺する。人間の悲哀は そのさかしさから生れる。

あるときは 浮世絵風な描線を 愛で、背神者の魅惑を 忘れかねてゐる。

論理は まだ 物と心を 支配するに足りなかつた。脆弱な女はいつも神秘化されてゐる。

朽ちてゆく民族の あはれな姿を みる。葎の茎が しきりにほつてゐる。

嗅覚の ふしぎな効果に ふと さみしさを感じる。毒ガスの襲撃を 恐れよ。

(昭和十三年八

月)

(\*)『夾竹桃』から

(62)

複雑怪奇の歌(\*)

巷でおほ声をあげてゐるのは、あれが若しも 偽善のひとつで あつたとしたなら。おゝ、信天翁あほうどりが うそろでよろよろ歩いてゐる。

玩具が 陽気にならんで ちひさな人生の縮図をひろげる。だが、あの無邪気な子どもたちでもが どこかに 世界の 憂うつを感じてゐる。

人間は ふしぎにも愚かな生きものである。知らぬ間に 魔法の色硝子を もたされて、お互ひを透き見しながら 争ひあつてゐる。

葡萄酒の渋味を味ふと、ふと 靈感が湧いてくると いふ。でも乾からびた人々には いても縁遠い もの語りである。

夢が みんなほろびてゆく。この空気はきめうな毒気を もつてゐる。さて、この世は かくて どんな光に照らされてゆくのであらうか。

(昭和十四年十一

月)

(\*)『夾竹桃』から。因に昭和十四年八月二十八日平沼内閣が「欧州情勢複雑怪奇」と声明して總辭職した。なおこの第一小節と第二小節は(58)「世界の憂鬱」の一部を流用してゐることお気づきの通りである。この作者は時々こういうことをする癖がある。

(63)

高勾麗の遺跡(\*)

とこ暗みの この古墳のなかにこそ 神秘の世界は 展げられる。壁にはゆかしげに 天女が舞つてゐた。

そこに ものしづかな 限らない命がある。妖しげな魅惑よ。この古墳のなかで、永遠の日を過ごすとしたなら。

ふしぎな怪獣が この壁面に 生きてゐる。それが わたしの現実の眼を とらへてしまふ。

そのみごとな 色彩におどろき、雄渾な構図に みいられる。二千年のあひだ 土に埋もれて、だから文化は なつかしいのである。

黄金の 象眼を施した 獅子のまなこが さんぜんと 輝く このくらい古墳のなかで。

貴人の けながい行列、甲冑騎兵の武将など、ありし昔の おもかげを この絵巻に 見ることの めづらしさ。

古めかしい 高勾麗の 風俗に興じ、その壁畫に じつと見入つてゐる。うちのなかの玄室は ひどく しめりを帯びてゐた。

みすばらしい 民家の跡から 花崗岩の 大きな礎石が 堀りおこされて、そこにも瀟洒な官女の おもかげが うかぶ。

あはれ、民族興亡の跡こそ はかなげである。人間の歴史は 絶えず ふしぎな

運命を つづる。

古墳の 傍に立つて、たかくそびえる。老嶺の山々を ながめながら、そとろに  
天地の悠久さを 痛感する。

(昭和十六年二月)

(\*) 「満州日々新聞」 康德八年 (昭16) 二月二十一日。『夾竹桃』に  
再録。同じ題で約八百字の文章があつて、そのあとにこの歌が載つ  
ているのであるが、ここでは文を省いた。

石原純新短歌抄（十四）

『ももんが』 一九八八年八月号

（64）

黒く究まる光（\*）

一

形容のない風と炎、

捉み得られない宇宙エーテル、

幻覚、錯覚、

感情の誘惑、

それらが充ちわたつてゐる狭い地上にも、

あらゆる現生を超越して

まつすぐに彼岸に達すべき

科学の流れが育つて来ました。

私たち人間に恵まれた普遍的論理、

最後の真への理想、

そのもとに養はれた私たちの科学は、

たくさんの起伏の難路をめぐりたどりて

むらがる荆棘のなかを岐<sup>わ</sup>け裂きて

今まさにその険悪な一頂点を

悠<sup>ゆる</sup>やかに流れ超えることが出来たのでした。

アインスタイン、

彼において私たち人間の思想が

どんなに険しい階段を攀<sup>は</sup>ち登り得たことでせう。

私たちのアインスタイン、

彼によりて、ひろびろとした宇宙が

私たちの展望の可能な領域に

どれほどおほく持ち来たされたことでせう。

現実のうへにとほく高まれる彼の理論

それは何という宏壮な姿でせう。

彼の説く空間と時間と、

それはなんと云ふ幽玄さを  
語つてゐるではありませんまいか。

私たち人間は  
現実とその空間のなかに呼吸し、  
その時間のなかに  
生命の経過を意識してゐる筈ですのに。

面貌はさまざまに変態して、  
あるふは夢想を喚びおこし、  
あるひは幻影をかたちづくらうとも、  
それはつゝに人間の感覚と感情とから  
まるで放されてゆくわけにはゆきません。

これに対して私たちの科学は  
より超越的な認識の世界をゆるします。  
私たちはアインシュタインと共に  
空間と時間との

そのふたつが交錯うる「世界」(\*\*)へ赴きませう。  
それは終端のない、しかし有限な  
高次元の世界をかたちづくつてゐます。

私たちの現生、  
私たちの存在、  
それは一瞬の、また一塵の、  
世界のなかの点に過ぎないでもありませう。  
しかも私たちの認識は  
とほく且つながく

この世界の極に及ぼさしめることも出来るのです。  
彼の論者を展げるとき、  
私は到るところにたくさんの数式を見出します。  
ローマ字やギリシヤ字や  
ドイツ文字の、大きな、そして小さな変態の  
いろ／＼記号のくみ合せが、  
なんと云ふ意味ぶかさを  
私たちに啓示してゐることませう。

現世の錯雑な

人間の交渉に疲れたとき、

もしくは凡庸の周囲の煩瑣から

暫らくの安息を欲するとき、

私は寧ろかやうな式に眼をふれてゆくことに

ひとつのこよない快さを感じます。

あの廻はるかな別様の世界に導かれて

すつきりとしたところが私に蘇ります。

あたかも人間の純愛の芸術が

私たちに限りない慰楽を与へると同じやうに。

現実からの一つの抽象、

実際、科学の現時の発展の程度において

それは単なる抽象に過ぎないであります。

けれども、それはまた確かに

全宇宙をつらぬいてあつ

ひとつの純粹の理路なのです。

私はこれに接することに

ちやうど、或る理想への憧憬に

ひたむきにふみあゆまうとする

処女の純真さを思ひます。

しかもそれを一時の思惑の所産ではありません。

論理の規則が

厳として私たちに存する範圍において

それにしつかりと膠着する

そしてそれにびつたりと適合する

私たちの明るいい心像でなくてはならないのです。

そこには永劫にかゞやく

ひとずちの光明が

この処女の純真さを

いつまでも守り保つてせう。



そして私たち人間の  
けだかい理想の究極にまで  
この心像をみちびくにちがひありません。

真、

私たちはそれをかう名づけます。  
私たちの感触するあらゆる物のあらはれが、  
私たちの須臾のこゝろに  
たちまちにしてその姿を変へ、

倏忽しゆくとして消ゆるあひだに、

ただ一つ滅びないものはこの真である。  
永劫、不変、そして絶対、

私たちが念じもとめ、

その最後の帰依のねがひをかくるものは  
これを措いて恐らくは外にありますまい。

変転極まりないこの人間の世に

綻び易い私たちの情緒は

やゝもすれば救い難い懐疑にみたされます。

黄いろい汚土をどや、あをい炎や、

また朱赤すしやくの厭むべき風が

強い刺戟を準備して、

私たちの感覚を擾してゆきます。

私たちはその始終のふかいなやみに

また堪へがたいくるしみに出遭ひ、

それらにうち克たうと努めながら、

それでも人間の感情のよわさは

屢々私たちのこゝろを惨ましく傷つけます。

黒く究まる光。

それは同時に白光びやくくわうです。

真、

私はその極すくひを喚びませう。

私たしの移り易いころを

永遠に安住させるものは

その滅びない一すぢの光ばかりです。

## 二

一切の混濁をぬぐひ浄めて

私はあのアインスタインと共に

すつきりとすがすがしく透きとほつた

たゞひとり、論理の律則がゆるされてゐる

そして整齐甘美の内容が

たくさんの記号で描かれてゐる

あの空間と時間との

ふたつが交錯せる「世界」に

私のころを委ねませう。

何といふ瞭あきらさか、

なんといふ美しさが

そこに私を待つこととせう。

相対的空間と、

相対的時間と、

さうしてその交錯せる世界のなかに、

ちやうどエジプトのモザイクのやうに

填充された自然の法則。

その形は、あるときは

たかい金字塔のやうに聳えます。

また、あるときは

あの不可思議な牝獅像スライシックスのやうに

その半身をあらはします。

私はそのまへにじつと心を潜め、  
自然が秘蔵してゐる

限りない深奥の世界から、  
私たちの心像として

そこに映じ得る限りの昭明を  
探りもとめることが出来るでう。

私の脳髓に透徹するほんたうのよろこび、  
ほんたうのうれしさに充ちた雰圍気が

そのとき私を包みます。

あたかも私の皮膚のまぢかに、

まことの愛人のあたゝかい息を

ゆたかに体感する瞬時のやうに。

私は絶対の、そして不変の「世界」のなか  
かやうにして生きることがゆるされます。

空間と時間と、

たとへそれは、私たちの直観から判断して、

どんなに相対的に異つてゐやうとも、

この両者の融合は

私たちすべてをそのなかに抱擁して、

その儘滅びずに残るでせう。

あゝ、永劫なる「世界」、私はそれを讃へませう。

そしてかやうな実在を

私たちに示してくれた

アインスタインその人に感謝しませう。

愛する私の友らよ。

私たしお互ひの住んでゐる現実が  
果たしてどんなに見えるかを、

この「世界」の立場において

こゝろみに想像してごらん下さい。

あはれな空間、

そこにはもろくくの歪みがあらはれ、

すべてのもの、縮まり（\*\*\*）が

私たちの眼をあやしませるでう。

私たちのかりそめな時間、

そのなかに私たちの生は

もはや定まつた寿命をも

数へられはしないでせう。

若し假りに私たちが光と一緒に

大空をはしると想像しましたなら

私たちの住んでゐたこのまろい大地も、

また、あの太陽球も、

空に燦めくあらゆる星も、

みんな厚みをもたない

扁たい面に過ぎなくなるでもありません。

そして私たちみづからは

どんなときの経過をも

意識せずにあるでせう。

すべてが扁平です。

すべてが瞬時です。

凡俗はいちがいに

自分の狭い直観のなかに閉ぢこもりて

それを妄断と斥けるかも知れません。

あはれな人たちよ。

あなたがたは心を謙虚にして

はるかな天上の声に

その耳をかたむけなくてはなりません。

愛する人たちよ。

あなたがたのまへに黙示された

あのみごとな多くの数式

それがすべての謎を  
すつかりと解いてくれるでせう。  
それらの記号が含んでゐる  
ほんたうの意味を悟り得たとき  
そのとき始めてあなたがたは  
私たちのアインスタインに従つて

それを正しく肯<sup>うべ</sup>なふことが出来るでせう。

アインスタイン、

私は彼を限りなく愛します。

こゝろから彼をふかく尊敬します。

彼は私たちの安住の世界を

あのはるかな彼岸のちかくへまで

おし廣めてくれた

私たちの恩人でなければなりませんもの。

アインスタイン

いま彼の名を私はたからかに讃へませう。

黒く究まる光、

それは同時にびやく光です。

真、あゝその一すぢの光明は

私たちの「世界」に普ねく充ちてゐます。

だれが徒らに阻まうとも、

だれが姑息に堰き止めやうとも、

その究まれる光は

永劫の彼岸につづいてゐます。

かやうにして私たちの真は

つゐに減びることなしに

しづかにとほく赫やくでせう。

私たちの度ましい心像に、

私たちのうつくしい、

うつくしい理念への世界に。

\* 「改造」(大 11・12 アインスタイン号)。『アインSTEIN 教授講演録』(大 12・2 改造社)へ再録され、そのさい加筆があるので、それに従った。

\* \*ミンコフスキーは空間と時間の四次元世界を単に Welt (世界) と呼んだ・

\* \*すべての運動する物体はその速さによる一定の比率で運動方向に縮まるという、ローレンツ収縮の假説を指している。この収縮は観測することができない、物差も同じ割合で縮むからである。

石原純新短歌抄（十五）

『ももんが』 一九九〇年九月号

（65）

ひとりの偉大なる科学者（\*）

一

或るひとりの偉大なる科学者、  
彼の頭髮はもやもやと波うつて、  
欧州洲人の特徴を帯びた  
褐色の寂びをもつてゐます。  
そして額の生えぎはに  
うすじろい幾條の線をみせて  
叡智のおもかげを偲ばせてゐる。  
しかも彼の額と双頬とには  
情愛のふくやかな柔らかみを湛へ、  
彼の両眼は  
芸術家らしいゆたかな潤ひと輝きとに充ちてゐます。  
あゝ、その静かな温容、  
わたしたちの憧憬は  
既にそこに惹きゆかれるのでした。

冬ちかい日の  
ある汽車の展望車のなかで、  
私はその横顔をじつと見守つてゐました。  
窓のうしろの明るい空が  
この穏やかな顔貌に  
光つた輪廓を与へてゐます。  
私はふと思ふのでした。  
自分の経験する現実が  
いま果してかやうな得難い内容に  
値ひしてゐるのであらうかと。  
なぜと、  
私は追求しますまい。たゞ私は  
その尊い現実に浸つて  
それを享受すればいいのです。

あゝ、ひとりの偉大な人と、  
それをかこむ衆人と  
なにの心おきもなく  
相對してゐるひとつの平和、  
私はそこにひたすらなる  
感激のこゝろに充たされて、  
力づくよく生きることが出来るやうにさへ思はれるのでした。  
彼の口かれ話される外國語も  
さながらにうつくしい絃の響きのやうに、  
私たちの共感をおこさずにはゐないのです。  
そして私たちみんなのこゝろが  
おのづからその親しさに  
吸ひこまれてゆくのでした。

二

「何といふおほぎやうな人のむらがりでせう。  
彼等は何を求め、何を得ようとするのでせうか。  
救世の予言を私はもたない。  
私のひとつの抽象的な理論が  
心のはるかな人たちに  
なぜ、そんなに感興をおこすのでせう。  
私自身には、それがどうしても  
ほんたうに理解し得られません。」

停車場や街々で

たぐさんの群集が緊張して  
彼をとり圍むのを眼にしては  
彼のくちから  
いつもかうしたことばが出ました。

驚嘆、

それは決して虚偽ではありません、  
衆人のもち得る純真さの一つのあらはれです。  
あゝ、併しそこには  
盲目的な、もしくは雷同的なこゝろの動きが、  
彼等を支配してゐないのでもなかつたのでせう。



ほんたうの体感は  
たゞひとり奥ぶかい理解から  
生れて来なくてはならないからです。

何かしら、偉さうな気がする。  
何かしら、ふしぎさがある。

おほくの平凡者の頭脳には、  
知らず／＼のなかに  
かうした「或る無批判」が行はれてゐるのです。

「数学をまるで解しない人が  
そして力学を学んだこともない人が  
どうしてひとつの物理学論を  
正しく判断し得るのでせう。

彼等の驚嘆は  
果たしてどこに生れ得るのでせうか。」

彼にはこれが自らの謙虚な心からの解きがたい疑問であつたのです。

私はたゞ彼にはかう答へませう。

「たましひの酔薬を

人間はみんな欲しがるのです。

そしてうつくしい酔ひをよそはうとします。

彼等のなかに

あなたはほんたうの眼ざめ薬を

まいてゆかれるのです。

私たちの肉体を

眞実に養ふ食物のなかに

あなたは先ず美味を準備されたのです。」

### 三

しろい粗刻みの石材が

あちらこちらに露はに出てゐる

ホテルの長い廊下を歩んで、

彼の部屋の扉をあけると、

「さあ、おはひりなさい。

こんどこそ、あなたがさきへ、

こゝは私のうちですから」と、  
無理に私を押し入れて、  
椅子へかけさせながら、  
刻み煙草を探すのでした。

くはへ煙草でゆつたりと  
けむりをくゆらせながら、  
もはや疲れを忘れたやうに、  
「私の自由な時間が  
いまやうやく私に来ました。  
さあ、ゆつくり話しませう」と。  
煙草のけぶりは  
ふしぎな渦動をつゞけながら  
電灯の光にてらされるのでした。

このくにの生活や芸術は  
彼にはまことに大きな驚異でもありました。  
けれど、それを観照し理解するために、  
彼の明晰な頭脳には  
普遍的な測度が欠けてはゐなかつたのです。

「熱帯の風物が  
寒國のそれと異なるやうに、  
孤立せる文化が  
芸術表現にどれほどの  
変態をゆるし得るであらうか。」  
彼の閉ぢた眼には、  
恐らくは、その日に深く印象した  
この國の古畫の描法と  
ひとつの仏閣の建築とが  
再び思ひ浮かべられてゐたのでせう。

しばらく黙してゐた彼はふと立つて  
夢のかなたを趁ふやうに、

やゝ暖かすぎるこの部屋の

電気暖炉のスウィッチを

彼のおほきな手で振りました。

夜のしづかな平安が

ひとしきり私たちを包んで

ふしぎな無可有の國へ

私たちをみちびいてゆくのでした。

「科学と芸術とは

よほど異つてゐるけれども、

併しそれらは、同じたましひの力を通じて、

密接に關聯してゐるのです。」

彼はあるとき、さういふことば言辞を

私のために書いてくれました。

#### 四

沈黙の律動、

くろずんだ音楽、

そこには重く抑へた譜調と

深い変化をふくむ緩やかさがある。

張りしめた皮鼓の

あの乾いた響き、

鋭い喉帯から裂け出るやうな

あの調だかい嘶子、

それらが本質的な莊重さをくまどつて、

あの瞬時の快濶さの断面を

私たちに挟んでみせる。

「能樂」は、ほんたうに

人間の神秘的な芸術のひとつです。

始めてこれに接した彼には、

ひたすらな感興がそのこゝろに湧いたのでした。

「自分もかやうな演能の

ふしぎな自分に浸つて

せめて自分の講壇にのぼつてみたい。

おゝ、私のふさはしい伴奏者よ。

私たちふたちは

かはりがはりに演壇に立ちあがつて

あの緩調を展開させて見ようではないか。

そして芸術が

人間のこゝろを魅するやうに、

私たちは

私たちの真をそこに説かう。」

かやうにして彼はいつも

彼のしづかな、そして熱心な

聴衆のまへに立ちました。

人間の民族的憎悪の

深刻なかなしみを体験して

はるかに世界を超越しようとする

彼の理想のまへに、

恐らくは、

くろく赫いてゐる

ひとつの著しい班象<sup>\*＊</sup>をのこして、

彼はいま私たちの國を去り惜しむのでした。

## 五

象のやうな笑ひと

ある人は言ひました。

自然のおほ空のなかに

どことも知られない風の奏する

おのづからな音楽のやうに、

また嬉々とした子どもらの

純心から生れ出るもののやうに、

彼の眼と頬とからは、

笑ひが湧きました。

そこには、うつくしい

直観の世界が見られます。

完璧な多次元の世界は

それに相應したいろいろな

断面を欠いてはなりません。

そしてそこには、めいめいの

調和が具へられなくてはなりません。

やはらかい雰圍氣と

淡い匂ひと味はひとを

おのづからに漂はせて、

ひとつのたかい生命は

私たちに

調和の世界を彷彿させます。

敬愛する偉人よ。

私はあなたのような人間が

衆くおほの中おほに選ばれて

あの偉大な科学理論の創設者であり得たことを、

ひとつの意味ふかふかい偶然たとして

感謝しなければならぬのです。

私たちの純真な科学のために、

そしてまた、殊さら

私たちがすべての人間のために。

(大正十二年一月)

\* 『アインスタイン教授講演録』(大12・2)に掲載されたときは「ひとりの偉大なる科学者に接して」となっていたが、『夾竹桃』へ再録されたとき、題名の最後の「に接して」が省かれたので、ここではそれに従った。初めの題では作者は一九二二年に初めてア教授に會つたような印象を与えるが、この作者はヨーロッパ留学のさい、チユーリヒにア教授を訪ね一学期間その研究室にいたので、東京では再會であった。初めの題は改造社が手を加えたのかも知れない。それはともかく、再録されたものには訂正加筆があるので、ここでは再録に従った。

\* 『講演録』も『夾竹桃』も班象はんとなっているが、これでは何のイ

メージも湧いて来ない。印象なら意味は一應通じるが、誤植にしては念が入り過ぎている。

あとがき

以上の作品を見ると、この作者が新形式の歌を作り始めた大正十一年ごろから、昭和十六年に及んでいる。従ってこの作者が新形式の短歌すなわち新短歌を作った年代をすべてふくんでいることが分る。昭和十六年以後は小規模の同人雑誌は刊行が困難になり、しかも短歌のような閑文字を連ねることは遠慮しなければならぬような雰圍気になって来たから、この作者の作品もこのあたりで終わっているのではないかと思う。

これらの作品を見ると、その作風にさまざまの変化が見られる。あるときは超現実主義の傾向が色濃く現れていたりする。このような変遷の跡をたどるためには、この作者が作品の製作と同時に展開した歌論を顧慮しなければならぬことになる。

前に精しく書いたことがあるので、一々お名前は出さないが、これだけの作品を集めるのはたいへんな作家であった。そのおかげで私はこの大先輩の作品を居ながらにして鑑賞することができた。改めて感謝の意を現わす次第である。

(一九八七年六月十二日)

追記

この稿が雑誌へ載り出して少し経ったとき、精しく言うとい一九八七年九月初め、『近代文学研究叢書』第六〇巻（昭和女子大学近代文化研究所、一九八七・九）を見ると、『現代文学大系』第六八巻『現代歌集』（筑摩書房、昭和四三年五月）の中に石原純の「新短歌抄」というのが出ているので、取敢ずこういうのがあるそうだと、ということ九月号へ付記しておいた。

その後これについても少し精しいことが分った。前記の昭和女子大学近代文化研究所から出た第六〇巻は中塚一碧樓・石原純・志田素琴・織田作之助・五十嵐力にかんする研究論文・参考資料のリストと解説を集めたもので、私は石原純の資料について相談を受けたのでこの本を寄贈されて、石原純の所を見たわけである。そうして石原純の「新短歌抄」という表記が目にとまり実は愕然としたのであった。すでに誰かがそういう表記をしているなら、私は別の表記をすべきであったからである。

そこで前記の「石原純」の部を担当された平井法のりさんに問合せたところ「私の表記の仕方が悪かったのですが「新短歌（一九三八年）抄」と題して収録されて

いるもののうち、石原のは「復活祭のない春」のみでした」という返事を頂戴した。つまり年刊歌集「新短歌一九三八年」からの抄録という意味で、石原のほかに収録されている一七人の名前も平井さんが教えてくれた。また平井さんは「復活祭のない春」をコピーしてくれた。それは本にして一ページと少し、行数にして四〇行のものである。一九三八年は昭和一三年で石原純の雑誌「新短歌」は第五巻に入っていた。

われわれはこの雑誌の第六巻の一部しか見ることができなかった。「復活祭のない春」にはめぐり会わなかったのである。われわれはもっぱら蔵書目録を刊行している大学図書館について調べたので未見のものが多数残っているのである。それにしても「石原純新短歌抄」という見出しは改めるに及ばないことが判明した。

(一九八八・五・一二)